

朱絃舎浜子

長谷川時雨

青空文庫

木橋もくきょうの相生橋あいおいばしに潮がさしてくると、座敷ごと浮きあがって見えて、この家だけが、新田島全体でもあるような感じに、庭の芝草までが青んで生々してくる、大川おおかわ口の水ぐちぎわに近い家の初夏だった。

「ここが好いぞ、いや、敷ものはいらん、いらん。」

広い室内すみの隅すみの方へ、背後うしろに三角さんかくの空を残して、ドカリと、傍床わきどこの前に安坐あんざを組んだのは、箏ことの、京極きょうごく流を創造した鈴木鼓村こそんだった。

「此処ここは反響はんきやうが好い、素晴しく好いね。」

も一度立つて、廻り縁えんの障子しょうじも、次の間まへの襖ふすまも、丸窓の障子もみんな明けて来た。

「ええね、ええね、なんか嬉しい気がするぞ、今日は良よう弾ひけるかも知れんなあ。あれ、あんなに潮が高くなった。わしや、厳島いつくしまに行つてること思出しています。ホ！」

また大きな体を、椽えのさきまで運んでいった。

「ほう、ほう、見る間まに、中洲なかすの葭よしがかくれた。あれ、庭の池で小禽ななか鳴いているわい。」

「翡翠かわせみでしよう。」

わたしは早く「橘たちばな媛ひめ」が聴きたかった。

「まあ、すぐじゃ、すぐじゃ。」

鼓村氏は閉口した時にする、頭の尖さきの方より、頸くびすじの方が太いのを縮めて、それが、わざと押込みでもするかのように、広い額に手をあてながら座についた。外で演奏する時には、ゆつたりした王朝式の服装と、被かぶりものであるが、今日のように平服のときは、便べん々べんたる太鼓腹の下の方に、裾すその広がらない無地の木綿もめんのような袴をつけている。

寛々くわんくわんと組んだ安坐の上に、私たちの稽古けいこ琴ことを乗せて、ばらんと十三本の絃いとを解いた。「山の手におると、乾かわくような気がすると、八千代やちよさんはいうているなあ。此家ここへくると、ジウツと、水が滲しみわたるようじゃというてたが、わしもそう思います。」

「岡田やちよ八千代さんは、水がすきで、御飯へもかけて食べますもの、夏は氷で冷たくしたのを。」

「や、そか？」

鼓村師の、大きな体と、ひろびろした頬ほおをもつ顔に似合わない、小さいな眼が、箏ことの上に顔ごとつきだされた。

「水は好いもんじやなあ、麴町の家の崖に、山吹が良う咲いているが、下に水があると好えのじやが——」

椽に栗山桶がおいてあつて、御簾のかかつている家の話に移っていった。

そういううちにも大きな掌は、むずと、十三本の絃をいちどきに握つて、ギユンと音をさせて締めあげた。

それから一絃ずつ、右の片手の、親指と人差指に唾をつけては絃をくぐらせて、しつかり止める始末をしてゆくのだつた。その扱いかたの見事さに、うっかり見とれていると、「あの、何じやね、話が先刻飛んでしまったのじやけど、妙な、不思議な女子で——」

と、指を湿らせる合間に、水をほめる前に、先刻話しかけたつづきを、思出したようにいうのだつた。

「わしも、いろんな弟子をもつたが、その女子ほどの名手は、實際会ったことがないほどで、それが、こつちから訊かなければ何も知らんふりをしているが、なんでも弾けるのでなあ、忘れてしまうと、わしのものを、わしが教えてもらうので——いや、ほんのこつちや。」

鼓村師は、自分の作曲したものでも、自分で忘れた部分は、爪音をとめて、絃の上に

手を伏せたまま唄うたっていることがある。感興おもういづが横溢おういつすれば、十三弦からはみ出してしま
うほどの、無碍むげの芸術境に遊ぶ人だった。

「では、河内かわちの国、富田林とんだばやしの、石いその上露子かみつゆこさんとどつちが——」

かつて、雑誌『明星みょうじょう』の五人の女詩人、鳳晶子おとりあきこ、山川登美子、玉野花子、茅野ちの

雅子まさこと並んで秀麗うつくしい女であつて、玉琴たまことの名手と聞いていた人の名をいつて見た。

ゆきずりの、我小坂橋わがこいたばししらくと、

一重ひとえのうばら、いづくより流れかよりし、君まつと、ふみし夕べにいひ知らず、しみ

て匂におひき——

と、私は口のうちに、石いその上露子かみの詩をうたつて見ていた。

それを、大きな掌てのひらは、遠くからおさえるように動かされて、

「あれは美人じゃからなあ——石河いしかわの夕千鳥には、彼女の趣味から来る風情ふぜいが添うが——

——わしが、今感心しておる女子ひとは、箏ことのこととなると、横浜から、箏を抱かかいてくる。小

さな体からだをして。」

ちいさな、というのに力を入れて、丁度いど絃いとの締まった箏を、軽々かるがると坐つたまま、ぐる

りと筆ぶんまわし規しのように振りかえた便次ついでに、抱かかえるようにして見せた。

「こんなようにしてじゃぞ。」

私の顔は笑っていたに違いない。鼓村師は割合、細心なところもあるので、箏を振り廻したのを、乱暴したように笑っているのだとも思いもしたように、豪放のような、照れたような笑いに、また首をちぢめてまぎらわした。

水の清い、石川の磧かわらに近く庵室あんしつをしつらえさせて、昔物語の姫君のように、下げ髪きちように几帳きちようを立て、そこに冥想めいそうし、読書するという富家ふうかの女ひとは、石の上露子とも石河の夕千鳥とも名乗つて、一人静かに箏を掻かきならす上手じようずの名があつた。それからまた、横浜から箏を持って習まなびにゆくという女ひとにもわたしには心あたりがあるので、思わず破顔したのだつた。

「共通なところがあるのでしょ。」

と私は言つた。それは、たしかに、二女に共通したものがあつたが、鼓村師には解げせなかつた。安坐あんざの上に乗せた箏に、柱しらをたてながら、

「その小ちいっこい女ひとは、几帳面きちようめんで几帳面で、譜をとるのに、これっぽっちの間違いもない。ありやどうしたことじやろうかね。箏の音はまた、それとは違つて、渺びよう々びようとしておるので——真の、玉琴というのはああした音色ねいろと、余韻とでなければ——」

だが、その玉琴の名手が、なんとしたことか、正午というと、何処でもお弁当を食べだすと、溜息ためいきのように、

「それがなあ、汽車のなかでもで——汽車じゃというたところが四十分そここの横浜と東京の間で、それも買つて食べるのではないのだから、ちゃんと、弁当箱を出すのだからわしの方が恥かしくつて、顔見られるようで愁つらかったが、すまあしてやつとる。見とるとわしも腹が空すくが、横浜までは何も売つてはおらなので——」

鼓村師は、大きな口と、小さな眼で笑つた。

そう言ううちに膝ひざの上で、箏の調子はあつていた。大きな、厚い、角爪かくづめが指に嵌はめられると、身づくろいして首が下げられた。

私も、ずつと離れて、聴くにほどよい席につき、お辞儀をすると、膝の上に手を重ねた。渡り廊の方に、聴きに寄っているものたちがいる様子で、父は向うの居間いまで聴いている気配ふしだった。襖ふすまの横には妹たちが来た。

莊重なる音色、これが箏かと思われるほど、他の流とは異なる大きなやかな、深みのある、そして幅広い弾奏だった。十三弦は暴風雨あらしを招よんで、相模さがみの海に荒ぶる、洋うみのうなりと、風雨の雄叫おたけびを目の前に耳にするのであった。切々たる哀音は、尊みことを守つて海神かいじんに身

を贅にえと捧ささぐる 乙 橘 媛おとたちばなひめの思いを伝えるのだった。

唄い終つてしまつてからも、最後の音が残されていた。心ゆくばかりに弾じたのであろう心足たらいに、暫時しばしの余韻をもつて絃いとの上から手はおろされた。

恍惚こうこつとした聴者たちは息をつくものもなかった。薄くにじむ涙を、そつと拭ふきとると、鼻をおさえているものもあつた。少時しばらく口をきくものもないでいると、鼓村師も満足げに、水おもの面の方へ眼をやつていた。

五月の潮の、ふくれきつた水面は、小松の枝振りの面白い、波除よけの土手に邪魔もされず、白帆しらほをかけた押送おしおくり船ふねが、すぐ眼の前を櫓拍子ろいさましく通つてゆくのが見える。

「ああ、よかつた。」

誰いうとなく呟つぶやきかわすと、

「あの船も、あつちやから来たんじゃないやね。」

鼓村師は、庭へ出れば、安房上総あわかずさの山脈が、紫青く見えるのを知つていたので、ふと、そんなことを言つてゐる。

曲からうけた感銘に、ほろほろとしている主客を、救つてくれたのは、鼓村師の好きな素麵そうめんだった。古くからいる、年とつた女中は、弾奏のあとで、冷たいものを悦ばれるの

を知っているの、大きな鉢へ落^{ふき}の葉を敷いて、透き通るように洗った素麺を盛ったのを、そのまま鼓村師の膝の前へ押しつけた。

「これを、みな食べたら、恥かしいがな。」

そう言いながら、一鉢はすぐになくなってしまった。それと同時に、

「あなた様の分は、もう一鉢ございます。」

と、代りの、前のより大きい鉢が運ばれて来た。

大きな人が、舞妓^{まいこ}でもするようににはかんで、口をつまんで、スツ、へ、スツ、へ、と中へ笑いながら、その鉢も引きよせたが、素麺を、するりと咽喉^{のど}にすべり入れると、先刻^{さつき}の、正午^{おひる}のお弁当の話がまたつづけられることになって、

「その女子^{ひと}が断わっているのには、先生には、誠に済まないのだが、どんなおりにも、正午^{ひる}の時計と、キチンとおなじに食べているので、そうしないと、お腹^{なか}の具合が悪いというて——何処か悪いところがあるのじやろうが——」

「お腹^{なか}に病氣がありますの。」

わたしは誠に手軽く答えた。

「なにしろ、お医者に言われると、ちゃんと、もう十年にもなりますでしょう、家^{うち}にいれ

ば、お午飯は、ビフテキ一皿と、葡萄が六顆ばかり。お母さんが、ちゃんと拵らえて、食べる娘は机の上の時計を見ていて——」

「なんじゃ、あんた、知つとるのか？ その女子。」

素麵を滝のように口にしたまま、眼を剥いたのが、黒い顔に、いかにもびつくらしというふうだった。

「ええ。」

お腹から押し出てくる笑まいを、わたしは呆れている、素麵の上にあるその顔にむけた。「横浜といえど——そうでなくつたつて、あんな人は、まあないでしょう、浜子でなければ——」

「そうじやとも。」

鼓村師は、一飲込みしてから大きく頷いて、

「あんた友達か？」

今度はわたしが説明する番に廻つて、ええと言つた。

「横浜の家へ着くと、お母さんという人が、御馳走をしたのなんのと、わしでも、どうにもならんかった。可愛いんじやね、一人娘のようじやつたが。」

「お婆さんは、浜子さんのお友達なら、どんな奉仕もするのです。彼処あそこのうちの台所は、とても立派な、調理用ストープが並んでいるし、井戸は坐くっていて酌めるように、台所の中央まんなかにあるし、料理は赤堀先生の高弟で、洋食は、グラन्द・ホテルのクック長が来ていたから、お婆さんの腕前は一流です。それに、山谷さんやの八百善やおせんは妹の家うちですから——」

江戸えどの味覚は、浅草山谷ととに止めを差すように、会席料理八百善の名は、沽券こけんが高かったのだった。

「浜子さんが、ムツと黙もくっているのです、お婆さんが、その代りにニコニコ、ニコニコして、阿亀おかめさんがわらっているように、例いづも笑い顔かほをしてるでしょう。」

「そうや、そうや。」

鼓村氏は、浜子が体が弱いので、転地ばかりしているから、その時持つてゆくのに具合の好いい、寸づまりで、幅の広い箏しんを、正倉院しょうそういんの御物ぎよぶつの形かたちを模して造らせた話をした。

「箏の裏板へ大きな扉とびらをつけて、あの開閉で、響きや、音色ねいろの具合を見ようという試みね、巧うまくいつてくれればようござんすね。」

あの箏の、裏板のバネを鼓村師が考えていることも、わたしは知っていた。

「あれは、わしも期待しています。わしやあ、日清戦争に琵琶を背負って行って、偉く働らいたり琵琶少尉の名も貰うたりしたが、なんやらそれで徹したものがあって、京極流も出来上ったが、あの人は、なんであんなに、箏にはいつていったものかなあ。」

わたしの眼に、ふっと、一文字国俊の刀が見えた。と同時に、横浜の家の、土蔵の二階一ぱいの書籍の集積が思い出された。

わたしが、知りたいものがあるとき、我儘なわたしは、自分で図書館へ行かずに、かくのごときものがほしく候と書いて手紙を出せば、たちどころに、何の中にかくありましたと、それは明細に、一字一点の落ちもなく奇麗に写してよこしてくれるのが彼女だった。あんまりそれがキチンとしていたので、わたしは彼女の芸術が面白くなる憂いがありはしないかと、余計な憎まれ口を叩いて、漢方匠者の薬味筆笥のように、沢山の引出しがあり、一々、書付けが張りつけてでもあるような頭脳だといったりした。たまには間違えて引出しをあげると、毒薬や、笑い薬なども出て来て楽しいだろうといった。そんなことも、こと細かに、下書きをした上で、その日の日記帳に書き止められ、しかも彼女の批判がつけられてあるのが、浜子の仕方だった。

しかし、彼女には、彼女らしいユーモアが計られ、静かに実行にうつされることもあ

るのだった。言つて見ればある時、年長者や、年下の者や、とにかく浜子の箏に心酔する、友達であり門弟である女人^{ひと}たちが集められた会食の席で、わたしに、

「おやつちゃん、ニヤアといつてごらんなさい。」

と、並んでホークをとっている浜子がいった。わたしはなんの遅疑もなく、早速ニヤアと彼女の言葉の下にやった。わたしの眼はお皿からはなれてもいないし、四辺^{あたり}の眼なんぞ考えにも入れていなかった。ただ、しかし、可愛らしい小猫の柔^{やさ}しみがなかったので、
「まるでドラ猫だ。」

と、眩^{つふ}やきながら、もいちど、せいぜい小猫らしくやって見た。

と、浜子は、下をむいて、クツクツと笑いを噛^かみ殺している。それがとても嬉しそうなのだ。で、お皿を下げに來た給仕^{きゆうじにん}人の笑い顔を感じて、わたしは卓^{テーブル}の人たちを見ると、みんな、呆^{あき}れきつた眼を丸くしてわたしにそそいでいるのだった。

あッはッははは。とわたしは男のように声を出してしまった。これが計画で御馳走があったのかと、見破つたからだつた。浜子は、あたしのニヤアンと言うことなど、あたりまえのことで、なんとも思ひはしないことは知りきつているのだが、ただ、浜子の友達のなかに、こんなことを、平氣でするものがあることを、吃驚^{びっくり}するであろうみんなの前で披

露して、呆れかたが見たかつたのだ。それが思い通りだったので、楽しかったのに違いな
い。お景物けいぶつに、わたしが、それがなんなの？ といった顔をして、呆れている友達たち
の顔を見たことまでが、予期した通りの好結果であつたのだ。

「おかしな人で——」

わたしはそんなことを思出しながら、笑うとなおと、穿はき好いからといって、太いふと
い、まむしのような下駄げたの鼻緒はなおをこしらえさせて穿はいたり、丸まるまげ髷まげのシンをぬいて、向う
側がくりぬけて見えるような髷あわかずさにゆったりするので、この部屋に来て坐ると、わたしがこ
っち側からのぞいて、安房上総あわかずさが見えるといったことなどを、とりとめもなく言つて、

「お父さんは、信州の小ちいさがた県ごり郡の、二百年も連綿としたお庄屋様の家督とりで、廿五
歳の青年お庄屋様は横浜へ飛んで来て、野惣のそうという生糸問屋きいとんやへはいってしまつたんで、横
浜が大きくなり、野沢屋が大きくなると、総支配人で店にぎを掴にぎる人になつたのですが——そ
の利きかない気性と、強いものがあるところへ、お母さんは江戸っ児こですの。前川という有
名な資産家の、太物問屋ふとものお嫁御よめごになつて、連合つれあいに別れたので、気苦労のないところ
へと再嫁して、浜子さんを生んだ時に、女の子だつたらば、琴が上手じょうずになるようにと、
箏をつるした下で産んだのだときいています。お稽古けいこのことで面白いことがあるのです。」

あたしは聴いているままを、話した。両親の秘蔵ツ子には違いないが、母の教えたがるものと、父親の教えたがるものとは、すこしちがっていることや、お母さんは、浜子が小さすぎる生れだちで、弱いのを気にして、運動にもなるからと、踊の稽古をはじめさせたが、次の日、乳母ばあやだけがお供をしていって、帰ってくると浜子は、

「踊のおけいこ厭いやだから、やめてください。」

と、母親にいった。そんなに気がむかないのなら、また、そのうちに行きたくなくなるまで休ませようと、乳母ばあやを師匠のところへ断わりにやろうとすると、

「いいえ、好いいの、もうちゃんと来ませんと断わって来ました。」

と、六歳むっつの彼女は言ったものだった。

箏の稽古の方は、箏を父親が好かないので、内ないしよで弟子入りしたのだった。

師匠の大出勾当おおでこうとうは、江戸で名の知れた常磐津ときわづの岸沢文左衛門きしざわもんざえもんの息子だった。開港地

の横浜が日の出の勢いなので、早くから移って来ていたが、野沢屋の主人あるじの囲い者で、栄華をきわめ贅沢ぜいたくをしついていた、お蝶さんという権妻ごんさいのひっかかりだったのだが、

そんな縁引きえんびがありながら、盲目のこととて、新入門の弟子の体に触さわって見たらば、あんまり小さいので、

「これでは仕方がない、大きくなったらまたお出なさい。」
と断わった。

それを、傍らで見ていた大出勾当の母親は、

「なにを馬鹿なことをいうんだ。稽古というものは、教えて見て、弾けるか弾けないかで断わりもするが、小さいから大きいからっていうことはない。大人だつて覚えぬ奴もある。子供だつて、覚えようつて来たものを、手筋も見ないで帰す馬鹿があるかッ。」

と、巻舌で息子を罵ののした。その見幕けんまくに、泣き出すかと思つた子は、ちよこちよこいって箏の前へ坐つたのだつた。

「大出さんは、手ほどきのお弟子ですけれど、浜子さんには敬意をもっていました。いつか、横浜で、その勾当さんの会があつたとき、箏を抱かかえてゆく浜子さんに附いていつたらば、行くとすぐ、あの人の番にして、誰も彼も謹聴です。箏のお師匠さんのお盲目さんたちが、コチコチに堅くなつて、背中を丸くして聴いていました。ある時、お父さんが、浚さらっている音色ねいろをきいて、待つてくれと、坐り直してから、その後のちは、間まをへだてても、キチンと正坐して聴いたものだといひます。で、そのお父さんが、何かにつけて、御褒美ごほうびをくださるのに、女の子の、浜子が望むのは、刀なので――」

「刀？　これは妙だ。」

鼓村さんはますます興ありげに聴いている。

「ええ、あの人は、幾振りか持っています。そのなかで、思いがけない、今では、国宝級の国俊も、お父さんが東京から買って来て、御褒美に貰ったものだと思います。」

「面白いなあ。当時の横浜は、金がうなるようにあつたのだと見える。」

「貿易商が、儲かつてしようがなかったのは、弗相場ドル相場だったといひます。なんにしろ、十六の子に百円の小遣いをもたせて、東京へ遊びによこす——」

「百円？　なんで——」

鼓村さんは信じられない顔つきだ。

「東京へ、とまりに来たことがあるのだそうで、四十日ばかり泊っていたのですが、なにしろ、山谷八百善という派手な家業うちの家ではあり、九代目団十郎のおかみさんは、八百善が実家さとになつていてという親類たちなので、時代は、丁度、明治二十四、五年ごろでした。しょうから、鹿鳴館ろくめいかん時代の直後ですわねえ。でも、浜子さんはそうっていました。父は、あたしが、小遣いをどんなふうにつかうだろうと思つていたのだった。」

「何を買ったかなあ、刀？　だが、子供では、他ほかが買わせやしなかったろうが——え、な

に、本？」

茶箱に何ばいかの書籍、それを担^{かつ}がせて、意気揚々とおちび少女は帰っていったのだ。

「親馬鹿は感心したろうがにえ。」

鼓村さんは自分も感心したように言った。

「島田に結つてたころ、髭^{ひげ}が今に生^はえてくるでしよ、なんて、からかったけれど——そう、こんな話もありましたつけ、佐佐木信綱^{のぶつな}先生の所へいつて、あたくしの友達の、こういう人を連れて来ますと言ったとき、その人ならば、思い違いをしたおかしい話があると、なんでも浜子さんが十五、六の時分ではなかったのでしょうか、錚々^{そうそう}たる歌人たちを歌会を開いて招いたときの話で、佐佐木先生も招^よばれていったが、どうも、その婦人は、年をとった偉い人なのだろうと出かけてゆくと、立派な家^{うち}で、集まっている人たちも、浜子^{たけし}刀自^じとは、どんな人かとみんなが堅くなっていると、現われたのは、紫の振袖^{ふりそで}を着て豎矢^{たてや}の字に結んだ、小つこい小娘だったので、啞然^{あぜん}としてしまったが、その態度は落ちつきはらつていたと——」

あははと、笑いだした鼓村さんは、突然、

「あれ、あれ。」

と、わたしに指差して教えた。家のものたちが、土手のはずれの方へ行って、ワイワイ騒いでいるのだった。老父も座敷の前の庭を横ぎっていった。

「どうしたのですか？」

鼓村さんは立っていつて、挨拶をしながら聴いた。

「いや、家鴨が河へ出て、沖の方へゆくそうで——」

「やあ、じいやさんが船を出した。」

と、言いながら、鼓村さんは庭下駄をつツかけて、老父のあとへ附いていった。

椽へ立って見ると、どうやら、河口へ出た家鴨を、通りがかりの小舟が、網を投げかけたので、驚ろいて橋の下を越して、沖へ出ていったものらしかった。

白い大きな鳥が、青い潮にういているのがくつきりと見えている。対岸の商船学校から、オールを揃えて短艇を漕ぎ出してくるのが、家鴨とは反対に隅田川の上流の方へむかつて迂るように行く。ベカ舟に乗って、コイコイコイコイと、家鴨を呼んでいるじいやに、土手の上で、危いから帰って来いと呼んでいるのを、橋の上の人が、大声で伝えているものも見える。

庭へおりて見ると、小篠の芽が、芝にまじって、健やかな青さで出ていた。そのかげを

赤い小蟹こがにが、横走りに駈かけたり、鋏はさみで草を摘んで食べている。

浜子さんの噂をあんまりしたが、あれで、鼓村さんに浜子という人の並々でない気性がわかってもらえたかしらと、かいなでの弟子と見てもらいたくない気で、よけいなおしゃべりをしたのが、軽い憂鬱ゆううつでもあった。

彼女の家は、横浜の、太田初音町はつねちょうの高台にあつて、彼女の書斎の二階からも、下の広間の椽側うねがわからも、関内かんないのいらかを越して、海が遠くまで見えるのを思ったりしながら、わたしは、蟹を下駄のさきでおどろかしていた。

二

新富町しんとみちょうの新富座の芝居茶屋おちややに——と、いっても、震災後の今日こんにちでは、何処どこのことか解りようがない。

銀座から行って、歌舞伎座の次の橋を越して、も一ツさきに築地橋つぎじばしという電車の止まるところがある。

この、築地橋の下を流れる川の両岸は、どっちから行っても佃島つくだしまへむかう、明石あかしち

町河岸^{ようがし}へ出た。浜^{はま}方^{かた}の魚場^{いさば}気分と、新設された外人居留地という、特種の部落を控えて、築地橋^{きよはし}橋^{きょうはん}畔^{はん}の両岸は、三味線の響き、粋^{いき}な家^{うち}が並んでいた。夕汐^{ゆうしお}の高い、靄^{もや}のしめつぽい宵^{よい}など、どっち河岸を通つても、どの家の二階の灯も艶^{なまめ}かしく、川水に照りそい流れていた。咽^{むせ}ぶような闇^{やみ}のなかを、ギイと櫓^ろの音がしたりして、道路^{おうちらい}より高いかと思うような水の上を、金髪娘を乗せたボート^かが櫓^かをあげて、水を断^きつてゆくのだった。

その、橋の向う角の一角を、東京の者は島^{しま}原^{はら}といった。そこにある新富座という劇場のことも、島原という代名詞でいった。

あたくしが幽^{かす}かに覚えているのだから、明治も中期のことであつたらうが、この劇場と、芝居茶屋の前に、道路に桜が植えられ、燈籠^{とうろう}がたつたほどこの一角は、緋^ひもうせんと、花暖簾^{はなぬれん}と、役者の紋ぢらしの提燈^{ちようちん}との世界であつた。尤^{もつと}も、演劇改良の趣意で建設当時には、花暖簾も提燈もやめさせ、板の看板だけにしたというが――

芝居の裏通りや附近には、有名な役者たちが住み、音^{おん}曲^{ぎよく}の方の人たちも、その一角的ななかその近間^{ちかま}にいた。櫓^{やぐら}下芸妓^{したげいしや}もあるといったふうで、四囲の雰囲気は、すべてが歌舞伎国領土であつた。

新島原という名は、京都で有名な、島原遊廓から来たものであつたらう。あまり短命だ

ったので、知れていないが、明治二年に、あの土地へ遊廓が許されて、新島原が出来か
 ったのだが、次の年の秋に大暴風雨があつて、中万字^{なかまんじ}という妓楼が吹き倒され、遊女が
 八人も怪我^{けが}をしたので、遊廓の未完成のまま立退き^{たちのか}を命じられた。

新富座の前名の守田座は、その島原へ建った。もともと、遊廓と芝居は離れない因縁を
 もつていて——歌舞伎の創業時代に遊女が小屋がけをしたことなどをいつていると、それ
 だけでも長くなるが——江戸開府のころ、日本橋区人形町附近の、葎^{よし}の生えているような
 土地を埋めたりして、葎原^{よしわら}という廓^{くわ}が出来、住吉町^{すみよしちょう}、浪花町^{なにわちょう}などと、出身地
 の地名をかたどった盛り場となり、その近くへ芝居小屋が建築されたそれが、いわゆる三
 座と称せられた江戸大劇場^{しばい}の濫觴^{らんしょう}で（中村座、市村座、山村座。そのうち山村座は、
 奥女中江島^{えしま}と、俳優^{いっくし}生島新五郎^{しんごろう}のことで取りつぶされた）、堺町^{さかいちょう}、葎屋町^{ふきやちょう}にあつ
 た。大火後、遊廓は浅草田圃^{たんぼ}へ移され、新吉原となり、芝居だけ元の土地に残っていたが、
 ずっと下つて天保^{てんぽう}十三年に、勤儉令^{しんけん}を布いた幕府の老中、水野越前守^{みづのえちぜんのかみ}が、中央に芝
 居小屋などのあるのはもつてのほかのこと、御趣意^{ごそむい}に反くというわけで、浅草猿若町^{ささるわかちよう}
 へ転地させられた。

そのころ、京橋木挽町^{こぎきちよう}にあつた守田座が、猿若町に立並んで三座となつたが、この、

守田座は、委くわしくいえば、もともと、芝居は四座あつて、守田座だけが別の土地に離れたいたので、これも古い名ではあるが、十一代目を継いだ——下しもうさ総あたりのお百姓から出て、中村翫がんえもん右衛門と名のつた、あまり上手でない役者が座元の養子になり、その子の十二代目守田勘もりたかんや弥を、子供の時分からその道に暁ぎようつう通するように育てた。

その人が、演劇道に有名な守田勘弥という策士で、明治維新後の情勢を見て、帝都の中心地となる京橋へ劇場進出を目論もくろんだ。元来木挽町は、以前の土地ではあるし、木挽町へ劇場を建てようという運動は、それよりも一足さきに、これもおなじ土地にあつた河原崎座きざうねめが原へ新築許可を願ひ出ていた。これはたぶん、目下いまの歌舞伎座の辺あたりであつたらう。——河原崎座主、河原崎権ごんのすけ之助は、九世団十郎が、市川宗家そうけに復帰しない、養子にいつていた時の名——現いま今でもあのあたりは、歌舞伎座、東京劇場、新橋演舞場が鼎てい立りつしている。

守田座移転は明治四年だというが、新富町新富座という、堂々たるものになつたのは、九年霜月しもつきすえ末に焼けてから再築し、十一年春に、西南戦争を上演して大入おおいりをとつてからだ。

明治十年の西南戦争は、明治政府の功臣たちの間の争いであり、兵の組織も新式になつ

てからであるから、薩南さつなんの地であつたとはいえ、朝野ちようやを挙げて関心をもっていた。西郷隆盛いこうたかもりは、江戸人が恩人として尊敬し、愛していた大人物だった。その人の最後を知ろうとするものが殺到したのだから、大入りだったわけだ。しかも、この戦争劇が、守田勘弥を上流人に接近させる便宜を得させたのだった。

芝居人と紳士、学者との交際が対等になった。それは明治の諸政一新という御思召おぼしめしにより、四民平等の恩典に浴したためではあるが、西南戦争劇上演のために、薩南の事情を明らかにするには、当時の顯官に接近せざるを得ない。もとよりその機を望んでいた勘弥が、取り逃すようなことはない。新富座主の豪遊する、木挽町の待合まちあいは、明治顯官の遊ぶところで、当時の待合のおかみ、芸妓げいしやたちは、お客の顯官を友達のように思っていたりするので、勘弥とその人たちを結びつかせた。

時は、洋行帰りの新人や、学者たちの間に、丁度演劇改良熱の勃興ぼつこうしつつあったおりで、勘弥はその機運をいちはやくも掴つかんだのだ。で、新富座本建築のときは、四十二軒あった附属茶屋を、大茶屋おおちやの十六軒だけ残して、あとは中茶屋ちゅうちやも廃した。間口まぐちの広い、建築も立派な茶屋だけ残したのだから、華やかなはずだった。

つい十年ほど前の、旧幕時代には、芝居者は河原乞食と賤いやしめられ、編笠あみがさをかぶらな

ければ、市中を歩かせなかつたという。差別待遇が甚しかったため、七代目団十郎（隠居して海老蔵、白猿と号す）は、

錦着て畳の上の乞食かな

と白したほどのばかりさが、新富座開場式には、俳優の頭領市川団十郎をはじめ、尾上菊五郎、市川左団次から以下、劇場関係者一同、フロックコートで整列し、来賓には、三条太政大臣を筆頭に、高級官吏、民間名士、外国使臣たちまで招待したのだった。

それからの新富座は、外賓接待には洩らされない場処となつて、ドイツ皇孫ヘンリー親王の来朝の時から、我国の宮殿下方も揃ひにて成らせられ、その時の接待係は、鍋島、伊達の大華族であり、そのあとへは香港の太守、その次へは米国前大統領グラント將軍という順に、国賓たちを迎えた。

歐風熱は沸騰して、十二年の九月には、外国役者の一座、英、米、仏人混合の一座をかけたが、言葉がわからないので一般には不向きで不入りだったという、種々の経緯はあつたが、新富座は劇道人の向上にはたいした役割をもつた。その後、麻布鳥居坂の井上邸で、天覧芝居という、破天荒の喜びをもつことになったのだ。

読者は、本文と、関係もなさそうなことを、なんで長々と書いているのだと、お思いに

なるかもしれない。この辺で、閑話休題と書くところなのだろうか、実はなかなか閑話休題どころではない。

明治十二、三年から、浜子の生れた十四年以降の、劇界の開展は、こんな時代だったのだが、すべての世の中も、またこんなふうな発展進歩の途をとっていた。新富座主が新機運を掴んだ機智と並んで、劇界の大明星であつた、九世市川団十郎の人格、識見——伝統的大立物の風格が、当時の学者、識者、貴顕たちに、自分たちの埒外の分野から同格者を見出した^{みいだ}欣びを以て尊敬し迎え入れられたことが見逃せない。団洲とよび、三三升とよび、堀越と呼び、友達づきあいの交わりを求め許した。そして、団十郎以外にも、彼にならんで名人菊五郎のあることも知つた。

「勸進帳」その他が、明治天皇陛下、皇后宮、皇太后の宮と、天覧につづき台覧になつたことは、劇界ばかりではない、諸芸の刺戟になったのだ。ことに、堀越家とは姻戚に、萩原浜子の母方はなっている。浜子が八歳の明治廿一年には、末松青萍氏たちの演劇改良の会が（末松氏は伊藤博文の婿）「演芸矯風会」に転身して、七月八日に発会式を、鹿鳴館で催し、来賓は皇族方をはじめ一千余名の盛会で、団十郎氏令嬢の、実子と扶貴子が、浜子とあまりちがわない年齢で、税所敦子——宮中女官楓の内侍——の

作詞を乞い、杵屋正次郎 夫妻の節付け、父団十郎の振付けで踊っている。

ここに、見逃せない事實は、女性進展の機運が、著るしくみなぎって、こうした方面にも、立もの娘だからということばかりではなしに、女優というのが、なくてはならないと、たとえ泰西の模倣そのままでも、論じられていもしたのだ。

そんなことを細かく言っていたらば、一篇の、風俗史的な女性発展史になってしまふから、それこそ閑話休題であるが、面白いのは、新富座が越して来て間もない、明治八年ごろの、築地風俗に、こんな日常時小話がある。

当時の新聞からとつて見ると、

雪の肌はだえに滴てきてき々たる水は白蓮びやくれんの露をおびたる有さま。

艶々つやつやしたる島田しまだまげ髻も少しとけかかり、自由自在に行きつもどりつして泳ぐさまは、

竜の都の乙姫おとひめが、光氏みつうじを慕つて河に現じたり。また清姫きよひめが日高川ひだかがわへ飛びこん

で、安珍あんちんを追つたときはこんなものか、十七や十八で豪気なもの。

と、合引橋あひびきばしの泳ぎ場ばで、新富町の寄席よせ、内川亭うちかわにいる娘が泳いでいたのを、別品女べっぴん中およを連れて遊びに行くとい出ている。

それも無理のないのは、その辺、紅毛人こうもうじんの散歩場なのでもあるし、つい先ごろまでは、

人中で肌などあらわすようなことは、死んでもしないというふうになはしつけられていたのだから、白昼衆目の見る前で、島田の娘の水泳ぶりには、記者も驚いたのであろう。

だが、また、佃島から、渡舟でわたつて来た盆踊りは、この界限の名物で、異境

にある外国人たちを悦ばせもした。そうかと思えば、島原の芝居は炎暑で不入り、元金

七千円金、昨日の上り高では千五百円の大損、それに引きかえて、同所の、火除け地へ、

毎夜出る麦湯の店は百五十軒に過ぎ、氷水売は七十軒、その他の水菓子、甘酒、諸商人の

出ること、晴夜には、半宵の物成高五百円位、きわめて景気よしともある。

なんと、蝦夷錦のように、さまざまな色彩の錯合ではないか——それらの人々の頭の上を照らすのに、

美なるかな、明なる哉、街頭に瓦斯ランプ立つ。これで西洋の市街に負けぬという見出しで、

美なるかなランプ、明なるかなガスランプ、一度点じ来て、我々の街頭に建列する

に及びてや、満街白昼の観をなさしむ。これに次ぐものはオイルランプなり、これまた

一行人をして、手に提燈を携ふの煩とわかれしむ。

といっている。新富座はもとより新設備を誇りにしている。当時流行の尖たん花ガスは、

といっている。新富座はもとより新設備を誇りにしている。当時流行の尖たん花ガスは、

といっている。新富座はもとより新設備を誇りにしている。当時流行の尖たん花ガスは、

花の形かたちをした鉄の輪の器具の上で、丁度い現今、台所用のガス焔こん炉のような具合に、青紫の火を吐いて、美観を添え、見物をおったまげさせていたのだ。

そこで、この間かん、明治四十年に至るまでには、新富座興亡史があり、歌舞伎座が出来上り、晩年は借財に苦しめられた守田勘弥もりたかんやが歿なくなってしまつと、新富座は子供芝居などで、からくも繋つないでいるような時もあった。

その新富座の茶屋丸五まるごの二階。盛時を偲しのばせる大きな間口と、広い二階をもつたお茶屋が懇意なので、わたしは自作の「空華くうげ」という踊りの地方じかたの稽古けいこ所に、この二階をかりてあてた。

試演は歌舞伎座で催すのだが、沢山の人を集めた和楽オーケストラなので、広い場所ではなくつては稽古が出来ない。この丸五の二階で、幾日も幾日も、みんながお弁当を食べた。主として箏ことをもつて、この歌劇風の「空華」の気分を出そうという最初の試みなので、作曲者の鈴木鼓村氏は、私の母がいる箱根へいつて、頭を冷し、気分を統一して、そして漸ようやく出来あがったのだった。

それを創意のまま鼓村さんが弾ひくのを、受取ってくれるのが浜子であった。彼女は、一度聴いていて、膝ひざの上で右の薬指を軽く打っているが、直じきに正確な譜にうつした。鼓村さ

んは弾いてしまうと、その次には、例の、気分によって弾奏の手がちがうのだった。

末すその方へいつて伴奏に三味線がはいるのを、長ながうた唄研精会の稀音家きねやわさぶろう和三郎が引きうけて

いた。少壮気鋭だった三味線楽家は、この試みが愉快でならないのだが、そんなふうで、

鼓村さんとは合せるたびに、ぴったりしていたのがそう行かなくなる。

箏ことの方の弾手ひきても多い。長唄三味線の方も多い。歌は、音蔵おとぞうという立唄たてうたいの人の妹で、

おかねちゃんという、それは実に好い声の娘と——その人は惜しくも亡くなったが——その姉さんとが主であった。岡田八千代さんも箏の方を助けてくれた。

とにかく、私の友達は、この仕事にみんな手つだつてくれた。踊りの方は市川猿之助が主役、女の方の主役は、堀越実子じつこ——市川翠扇すいせんという女優の名で出演し、七人の舞女ななたりぶじよは、そのころの新橋七人組といわれた、小夜子さよこ、老松おいまつ、秀千代ひでちよ、太郎、音丸おとまる、栄えいりゆ、竜りゅう、たちだ。この組はこの組で、浅草千束町せんぞくちやうの市川段四郎氏自宅の舞台と、歌舞伎座案内所の表二階とで稽古けいこしていた。

楽座の方は、曲の打合せが重なるほど、面白い出来ごとがあった。とうとう、ある日、箏と三味線の正面衝突となつて、和三郎がカンカンに怒り出す。鼓村さんは、幾杯もコップの水を呑んだが、それでも熱して、そら豆のゆでたのを盛った大どんぶりのからになつ

たのに、これに水をくれといって、水が運ばれた来たのも知らずに弾いていたが、

——そんなこというて、わしやあ——

と、言うが早いのか、どんぶりの水を口にもってゆかずに、一、二分^{ぶぶ}苳^ぶりの赤い熱^{にえあたま}頭の
上へ、ごんだまま、ザブツとぶっかけてしまった。

箏の上である。夕立ちのように水は落ちた。それも知らないで彼は熱中している。和
三郎は小腕をまくって、ブルブル^{ふる}慄えながら、冷静をとりもどそうとして、煙管^{キセル}に火を点^つけ
たが、のぼせているので火皿^{ほぎら}の方を口へもっていった。

みんな、座中のものは、びっくりしたように、おかしさもおかししではあるが、気の毒
さで押だまってしまった。

と、その時、その騒ぎと引き離れて、膝^{ひざ}の上に箏^{ことじり}尻^{しり}を乗せ、片手で懷紙^{わいし}に書いた譜を
見ながら弾きだしたのは浜子だった。彼女は、喧嘩^{けんか}には捲^まきこまれず、両方の言い分をき
いて、両方の譜を、その争いのなかからうつしとって、合うように接合してしまっていた。

浜子が弾きだすと、和三郎は煙草^{たばこ}を止め、鼓村も弾く手を伏せて聴いた。

「あ！ それなら好^いい」

そう叫んだのは和三郎だ。

「ああ、そや、そや。なんじや、それじゃったわい。」

と、鼓村さんも叫んだ。

みんなの顔に、ホツとしたくつろぎが浮び、同時に誰も彼もの笑いが爆発した。

「なんのこった。」

と、^{つぶや}呟きながら、和三郎は三味線をとって、浜子の方へ、せわしなくむき直った。鼓村さんは、例の首をひっこめて、きまりわるそうに、箏にかかった水の始末を、弟子たちにしてもらった。

みんなが、急に景気よく、しゃべったり笑ったり、^や擲^ゆしたりするなかで、浜子だけは、別天地にいる人のように、すこしも動揺されず、^{じき}直に^{しまい}最後まで完全につくりあげてしまった。

「ほんのこのうと、まだよう、まとまっていなかったのじゃ。」

鼓村さんは、自分だけでなら、どんなふうにも弾けるので、癖になってしまつて、困ると自分でこぼして、^{かるがる}気持ちが軽々したように、

「浜子さん、有難う有難う、助かったわい。」

と機嫌よく言った。

その時、わたしは、浜子は、ひっこみ思案なのだが、大きなものの作曲も出来ると信じた。

千束町の喜熨斗きのし氏の舞台へ、私と、浜子と鼓村さんと翠扇さんみずしめとが集った時、猿之助役おとどの大臣の夢の賤夫しずのおと、翠扇役の夢に王妃となる奴婢みずしめとが、水辺みずのほとりに出逢うところの打合せをした。猿之助の父は段四郎で踊りで名の知れた人、母のこと女は花柳はなやぎ初代しよの名なとり取で、厳しくしこまれた踊りの上手じょうず。この二人が息子のために舞台前に頑張がんばっている。鼓村さんは息子が踊りで叱しかられるのまでハラハラして、その方へ気をつかうので、琴柱ことじをはねとぼしたりした。

「おや、おや、どうも。この方が乱れて——」

と、温厚な段四郎は、微笑しながら飛んだ琴柱を拾いに立った。可愛らしい鼓村は、大きな、入道にゆうどうのような体で恐縮し、間違えると子供が石盤せきばんの字を消すように、箏いとの絃いとの上を掌てのひらで拭き消すようにする。

浜子の方に狂いはない。その日の帰りに、千束町を出ると夜暗よやみの空に、真赤な靄もやがたちこめて、兀然こっぜんと立ちそびえている塔が見えた。

「あれは、なんだろう。」

私は、すこしぼんやりしていて、見詰めて立ちどまった。

「公園裏の方にあたるから——十二階でしようよ。」

「ああ、りよううんかく凌雲閣？」

まあ、なんて綺麗なのだろうと、二人は夜の、浅草公園の裏から見、思いがけない美観に見とれた。

——楽劇「浦島」！
うらしま

私の頭のなかに、いつか手をつけて見たい、大きな望みがその時、かすめて過ぎた。

楽劇「浦島」の一部分上演を、坪内先生から許されたのは、それから二、三年後のちだった。浦島は六代目菊五郎、狂言座第一回を帝劇で開催するときだった。

作には、こと箏の指定はないのだ。各種の三味線楽と、雅楽類だったのだが、私は、おゆるしをうけて、浜子の箏を主にして、三味線は一中いつちゅうぶし節の新人西山吟平ぎんぺい、雅楽は山やま之井のい氏一派にお願いしようとした。

だが、なんといつても箏の浜子を説きおとすことが一番の難関なのだ。

せやまわたしはぶらりと行って、なんでもないような顔をして、彼女を散歩に引き出した。伊勢山だいにんぐうの太神宮の見晴しに腰をかけた。

「何をそんなに眺めているの。」

「海を。」

彼女は、何かわたしが計画たくらんでいるなど見破やぶっていた。わたしが突然に行つて、歩こうなどということから例外れいげすぎるのだったから。

「海なら、佃つくだからでも、あたしの宅うちの座敷ざしきから見えるのに。」

「うん、でも、歩いて見たかつたの、芒のげむら村から、横浜新田しんでんを眺めた、昔の絵が実によかつたものだから。」

そんなことついたりで、先刻さつぎ、横浜駅前の（現今の桜木町駅さくらぎちよう）鉄かねの橋を横に見て、いつもの通り、尾上町おのえちようの方へ出ようとする河岸かしつぶちを通ると、薄荷はつかを製造している薄荷にょの香においが、爽快そうかいに鼻をひっこすつた、あのスツとした香かを思いだして、私は一気に言つた。

「坪内先生の浦島ね、竜宮のところだけ、作曲してもらいたいの。」

「だめ、だめ。」

浜子は強い近眼鏡を光らして、呆あきれたように、
「あなたは、あたしを買いかぶりすぎている。」

「いいえ、臆病だときえ思っている。他の人は、七、八分もった才能を、十二分にまで見せている。浜子さんは、十二分にもつているものを、一、二分しか見せない。それも、よんどころない時だけにね、けちんぼ。」

それつきりで、二人は黙りあつて、いつまでも腰をかけていた。日が暮れかかると、どつちからともなく立つて歩きだしたが、口はきかない。

三

日はすっかり暮れかけていた。黙つてさきへ立つて、浜子が導びいた広間のうちは、一層たそがれの色が濃かった。

浜子は、壁によせて立ててある「吹上げふきあ」という銘なのある箏ことに手をかけていた。「吹上げ」の十三本の絃いとの白いのが、ほのかに、滝が懸かったように見えている。

吹上げの浜しろの白しろぎく

さしぐしの夕月に――

とか、なんとか、わたしが即興詩を与えたことがあつたが、その、朝と夕べとの小曲の

作曲が、どうも気に入らないといって、どうしても聴かせてくれないので、わたしも、その歌を忘れてしまっている箏だった。

浜子は言った。

「調子は？」

それは、やるともやらないとも、返事を口にしないが、たしかに「浦島」の作曲についていつているに違いなかった。

「変えなければいけないでしょう、今までになかったのでもよろしい。そして、音を複雑にするために、高いのと低いのがほしい。以前からある替手かえてというものとは違った意味で

——

箏の調子を低くしろということとは、これは凡手ぼんしゅには言えないことだ。限りのある柱のおきかたであるから、低くするには、絃いとの張りかたをゆるめるよりほか手はない。してまた、ゆるめた絃は最も弾ひきにくいのだ。第一、爪音つまおとが出ない、下手へたに強く爪つまをあてれば柱じが動き出す。

「莊重ねな音を出す工夫は——」

鼓村師の独特の爪でなければ——だが、鼓村師のはまた格別な品ものだ。象牙ぞうげの、丸味のあ

る、外側を利用して、裂断^{さい}た面の方に、幾分のくぼみを入れ、外側は、ほとんど丸味のあ
るままで、そして、爪^{つま}さきの厚味は四分^{しふ}もあるかと思われる、厚い、大きな爪だ。それな
ればこそ、撫^なでるような、柔らかな、霰^{あられ}のたばしるような、怒濤^{どとう}のくるような響き――あ
の幽玄さはちよつと、再び耳にし得ない音色^{ねいろ}だった。

「あああれは、あの人でなければ出来ない。」

そうはいったが、浜子も、その事も考えてもいたのだ。

「この音色で、非力^{ひりき}なわたくしの爪音^{つまおと}が、どこまで達^たするかしら。」

充分に、絃^{いと}と、柱^じとの融合を計ったうえ、浜子は研究の態度でいった。やれるかやれな
いかは、この、音の響きひとつであるという真剣さが溢^{あふ}れていた。

私は、縁側の障子を開いた。高みから見^みる横浜^{かんない}関^{かん}内の、街^{まち}々^{まち}の灯^{はな}は華^{はな}のようにちら
めいて、海の方にも碇泊^{ていはくせん}船^{せん}の燈影^{ほかげ}が星のようにあった。次の間^まの境をあげると、家^{うち}の人
たちは、二人でむつり帰^{かえ}つて来て、燈もつけない室で、箏^{そう}をとり出して、弾くのでもな
く、何かもずもずやっているの、何ごとかと案^{あん}じていたように、そつと来て様子を見て
いた。

「こんど、菊五郎と、狂言座という研究^{けん}劇^{げつ}団^{だん}を組織^{そくし}して、帝劇で、坪内先生の楽劇『浦島』

をやらせて頂けるので、浜子さんに、箏を引受けてもらいたいの——」
と、私は説明して、

「やつてもらえるか、もらえないか。この音が、何処どこまで響くか——出来る出来ないより、きこえないようなものが弾いたつてしようがないというのです。」

そう言い足すと、浜子は、その通りというように、絃に触れながら、頷うなずいた。

浜子のお母さんほど好い人はない。そして、浜子の養子さんの賢吾けんごさんもまた、それに劣らずよい人で、浜子の芸術に尊敬をもっている。

お母さんは奥深い土蔵くら前に陣どり、賢吾さんや、女中たちは、外へ飛出おもてした。坂の下へいったり、邸の裏へ廻つたり、ずつとききの角かどまで行つたりして、只今ただいまは低く、只今のはハッキリと聴えたと、幾返りか報告した。

聴えないというものはない。箏の音とは、はつきりわかりませぬが、響きはきこえましたと、ずつと、さきの方へいったものまでが知らせた。浜子は、ほ、ほ、とそれが例の、こごむようにして笑つて、

「あなたへの同情は、素晴らしいものだ。」

それが、では、やりましょうという、返事のかわりなのである。

「まあ、まあ、まあ。そうでございますか、浜さんが、やると申しましたか？」

顔中が、笑まいでくずれそうにいう母御へむかつて、

「あなた方は、おやつちゃんが来たときから、氣持に縛られてしまっていたのですよ。」

と、もう彼女は、樂劇「浦島」の初版本を出して来て、わたしのと突きあわしている。

改めて私は、もう一度、一番低い音をきかせてもらった。

「この絃を、もう三本か五本足して、箏の丈を、もう一尺ばかり長くして見ようか。」

私の空想は飛拍子もないことを言い出す。と、浜子は咄嗟に、

「わたしというものを、生み直さなければ、それは不可能でしょう。」

彼女はクツクツ、おかしように、機嫌よく笑っている。わたしは、人並より小さな彼女を見直していった。

「しようがないな。」

「ほんとにしようがない。これで勘弁ししてもらいましょう。」

大正三年の二月、狂言座は、夏目漱石、佐佐木信綱、森鷗外、坪内逍遙、という

大先輩の御後援をいただいて、鷗外先生は新たに「曾我兄弟」をお書き下さるし、坪内

先生は、「浦島」の中之段だけ、めちやくちやにいじるのを御寛容くださるし、松岡

映丘氏は、後景、衣装を全部引き上げ、仲間になつて下さつた。これは、前回に書いた舞踊研究会の「空華」の時、松岡さんと、私の好みと、鈴木鼓村さんの箏曲とがぴたりしたので、松岡さんが進んで会員となられたのだが、今度は、その松岡さんが随分お疳癰で、日文、矢ぶみで、わかるのは君だけだろうという詰問状がぞくぞくと来た。ずつと後になつてから、

「わたしも年をとつたから、もう疳癰はおこさないが、時雨さんの疳癰もたいしたもんだ。」

なぞといわれたが、過日、『源氏物語』劇化について、随分お骨折なされたにもかかわらず、良い結果を見なかつたあとで、氏の顔を見た時に、当局の許可不許可にかかわらず、芝居道というものがどんなもので、疳癰を起してもどうもならないということ、さぞ不味にお味になったことも多かつたらう、当年の疳癰など、芸術家としての疳癰で、むしろ、思出は悪くないと思つた。

が、そういう大規模の中幕「浦島」の童宮での歓楽と、乙姫との別れの舞踊劇は、浦島の冠りものとか、履とかあまりに（奈良朝期の）実物通りによく出来たので、首が動かせずさすがの菊五郎も踊れなくなつてしまつたりして、箏の作曲の評判はすばらしくよか

った。

*

「浜子さん、あなたは、自分の箏を、もっと生かして見る気はない。」

病弱であつた私は、何かしら、精一ぱいのことをしていなければ、生きている気のしない氣質たちだつたので、軀からだの弱い彼女に、生きているかぎり、力一ぱいのものを残させたい気がして、ある日、差向いでいるときに言つた。

「それは、願うことだけれど、——出来るかどうか。」

そんなこんなで、彼女の箏曲を聴いてもらう会をつくるようになった。こうじまちゆうらくちよ麴町区有楽町の保険協会の地下室の樂堂で、大正九年に開催したのがはじめで、震災の年まで三回つづいた。私は文壇の人に主おもにお出いでを願つた。

浜子は、彼女の耳で、彼女の心で、鈴木鼓村の箏曲を認め師事したが、彼女はいちはやくも、朝鮮から帰り、上京したての宮城道雄みやぎみちおを若き天才と許していた。であるから、この浜子の箏を聴く会の、第一回だか二回目だつたかの時、宮城氏に助演こを乞うて、「唐からぎぬ砧た」のうちあわせは、真に聴きものだつた。会が終ると、彼女は眼の暗い宮城氏の手をとつて、それは実に幸福そうに自動車へ導いていった。そして、花束かたわらを傍におきそのまま

宮城氏を送っていった。

浜子を主席にした卓^{テーブル}へ帰って来たときの彼女は、実に生^{いきいき}々として、はじめて見せる顔だった。まさに、この時分の彼女の爪^{つま}音^{おと}には、彼女の細い腕から出るものではない大きな、ふくみのある、深い、幅の広い音が出ていた。

「浜子は巧^{うま}い。」

「浜子さんの箏は好^いいなあ。」

何処でも好い評判だ。

菊五郎の、芝公園の家^{うち}では、なんでも、しんみりと、浜子と宮城氏との合せものを聴きたいというので、ある夜、その会合があつた。実際、あんな好い気持のものを聴く機会は、そうあるものではない。と、今でも思出すほど、宮城氏の三絃と浜子の箏とが、流れる水のように、合し、むせび、本流となり、あるいは濺^{よど}む深味へ風が過ぎてゆくようになったりする音色^{ねいろ}は、曲が止んでも、弾いたものも聴くものも、消えてゆく、去りゆく音を追つて、すぐ、果敢^{はか}なくも思出となつてしまう脆^{もろ}さを、惜しむ思いにホロホロとする気持に浸っていた。

朱絃^{しゅげんしゃ}舎——そんな名を選んだのも、その時分のことだった。「朱絃^{しゅげん}」という名の定^きま

るまでには、どんなにさまざまの名がえらまれたか知れない。私の大形ブックの幾頁^{ページ}かも、古い詩句の中から、およそ、これはと眼にとまり、心にとまるものを抜きだして、書いておいたか知れないのだった。

前にも書いたかも知れないが、彼女が、何処か『源氏物語』のなかの、明石^{あかし}の上に似ているので——氣質もそうであれば、箏の名手でありながら、我から聴かそうとは決してしない。それに、容貌^{さうぼう}も立ちまさっているのではないが、人柄が立ちまさって見える点など、私は、彼女にそんな事をいったこともある。彼女もその評は、嬉しくないこともなかったのだ。そしてまた、彼女の趣味も、その精神^{おおね}は、王朝時代のものであった。私は、もちつと古く遡^{さかのぼ}つて、もつとずつと、今日^{こんにち}よりも新らしくと言うので、ともするとくいちがうのだが、「朱絃」は、ともかく納まった。彼女の門下はみな、朱絃——朱^{あか}い絃^{いと}の十三絃をもちいることにした。

覚悟はよいか？ そんなことばではないが、私は時おり、もはや、後退してはならないと、生活に余裕のありすぎる彼女に、回避的になりがちな用心癖を警戒した。が、それほど熾^{しれつ}烈に、芸術的良心をもたぬ人々の間には、彼女が軌道に乗って、乗りだしてゆくのが不安にもなった。古い側の人の悦びは、困らない奥さんの芸であって、名人だとされれば

それだけでよいというようなところもあった。また、あまり彼女を惜みすぎて、名物茶入のように箱に入れて、あんまり人目に触れさせないのを、もつとも高貴であると考えるものも出来てきた。

彼女は私にむかつて、若い夫人をもつて、物質のためにいらいらしていた鼓村さんのことを、よく、こんなふうにいっぱい。

「鼓村さんが、盲目になつたら、どんなに名人になるだろうに。」
と、わたしはすぐ、

「浜子のうちが金持ちでなくなると、どんなにこの人は好くなるかしれないだろう。」

その時分のことだった。市川猿之助が、明治座で、「虫」という新舞踊を上演したが、尺八と箏でやつて見たいと相談をうけた。「空華」の時のこともあるし、箏は浜子に頼みたいといった。

オー・イエス！ 私は嬉しく心楽しいとき、よくこんなことをいう。猿之助もよく踊らせた。それに、劇場で、箏を主とし、しかも、あの、芸術的香気の高い、いわゆるお賑やかなケレンの多くない、まことに、どつちかといえれば手のこまない、一本一本絃の音をよく聴かせようとする、テンポの早くない箏を、用いさせようというのには、よほど劇場

当事者によい印象を与えていることを思わなければならない。これは、真の箏曲というものを、一般に認識させる上に、非常な良好な機会だと思った。しかし、また、冷静に考えて、「虫」であるというには、尺八ふえが主になることもあり得べきことだが、尺八ふえばかりではまとめてゆけないから、ある部分は尺八ふえに譲つても、結局箏を主にするになると考えた。

猿之助も、その間かんのことはよく知っている。

「浜子さんをお願いする以上、あの方の芸術、あの方を、いわゆる芸人あつかいには決してしません。あの方が、好意をもつて出てくださることを、『虫』は別番附べつばんづけにしますから、あの方の待遇は別に御出演下さる口上こうじょうを書いて添えます。座方ざかたからも、決して失礼のないように、楽座の席も別につくらせます。それでもいけなければ、作曲して下さるだけでもよいから。」

私は、猿之助の気持を嬉しいと思った。そこまでに事を運び、主張を通すのは、なかなか誠意でなければ出来ない。

「さあ、浜子さん、作曲してあげるかあげないか、出演は第二の問題。」
と、私は厳きつく言った。なぜなら、この位な皮切りをした方が、彼女をお道楽芸にしておこ

うとするものへの、決戦的な——といおうか、大切にしている腫ものへの大手術だと思つたからだつた。

ともあれ、その稽古所と、打合せの場処をつくらなければならない。私が、佃島つくだしまの家にいることがすくなくなつて、新あらたに、母の住むようになった、鶴見つるみの丘の方の家うちにいたし、佃島ししまでは出入りに不便でもあるので、小石川に大きな邸をもつて、会計検査院に出ていたお父さんが歿なぐなり、家督なぐの弟御ごが役の都合で地方にいたので、広い構えのなかに、ポツンと独りで暮している、若い時分は、詩文と、名筆で知られていた、浜節子という、これも浜子の古い仲良し友達で、朱絃舎の一員である人の、邸の表広間を借りることにした。で、便次ついでに、朱絃舎の門弟といえ、浜子の箏の耽美たんびしや者である、最も近い仲の人たちばかりだつた。それらが密接なつながりで垣かきをつくり、師の芸を盗むどころか、師の芸は伝えられないものとしてあがめている。この、浜節子さんは、年少のころから片上かたかみのぶ伸る氏たちを友人にもつていたような、浜子には学問の友達である。彼女が泊りがけで、箏の稽古に横浜まで来る時には、リの字のようにふとんを敷くのだと笑つた。節子さんは娘時代には、一反半たんなくては、長い袖そでがとれなかつたという脊高せいたかのつぽ、浜子は十貫にはどうしてもならなかつたか細ほそい小さな体だつた。私の妹の春子も、泊り込みの通い弟子

で、浜子のお母さんからは料理、浜子からは箏を、ずっと教えてもらっていた。

春のお魚は鯖さかなざわら、ひらめ、などと、ノートさせられて「今日午後六時の汽車にて帰す」と

浜子を書き添え、認印みとめを押してよこした年少のころ、浜子の母人ははびとはホクホクして、

「なんて可愛い、おとなしい子なのだろう。」

というと、浜子は、

「おしやま猫が、いつまで猫をかぶるかしら。」

と笑ったりした。その春子も成人して、ぐつと遅たぐましくなってしまうていた時、「虫」の作

曲の顔寄せがあつたのだつた。

金屏きんびょうの前に、紫檀したんの台に古銅こどうの筒の花器はないれ、早い夏菊の白が、みずみずしく青い葉

に水をあげていた。深い軒に、若葉がさして、枝の間から空は澄んで見えた時節だつた。

好い毛氈もうせんの上に幾面かの箏が出されてある。猿之助は、黒の紋附きの羽織はかまに袴をつけて、

「荻原さん、聴入れて頂きまして、ありがとうございます。」

と、手についていった。浜子も丁寧におじぎをかえした。

であるから、いかなる異変があつても、この約束は破れないと、私は信じた。が、遅れ
てはいって来た春子は、いかにも腹が立つように、苛いらいら々そこらを歩いて、唾つばを吐いたり

した。猿之助は帰ったあとで、尺八の方が人が残っていたが、それも帰ると、浜子の芸術を冒瀆ぼうとくするということを、彼女は雄弁に泣いて諭いさめた。

これは、春子を通して、浜子の周囲一同の代弁であったのかもしれない。後あとから来た浜子の手紙でも知れた。私は、それを、無理とは思わないが、世間見ずな思い入りだと思った。若い猿之助の悲憤を思いやった。慰めようもない思いでわびた。そのかわりに違約せめの責をひいて、私は浜子と絶交すると言った。

猿之助からの返事は、小生しょうせいゆえに、長い友達と絶交してくれるなどというのだった。

私は、以前まえから箏曲そうきよくでは「那須野」なすのが、すこしの手も入れないで、あのまま踊になるということをいつも言っていた。それで故尾上栄三郎おのええいざぶろうが「踏影会」とうえいかいを市川男女蔵おめぞうとつくった時に、浜子の地で上演したことがある。芒すすきすらあまり生えない、古塚の中から、真まっし白しろの褂うちぎを着て、九尾きゅうびに見える、薄黄の長い袴で玉藻たまもの前まえが現われるそれが、好評であつたので、後に、歌舞伎座で、菊五郎が上演しようとし、地の箏は朱絃舎浜子にと、随分と望み、浜子もその心持でいたのだが、その実現は見なかった。

ともあれ、箏曲そうきよくの劇壇への進出は、朱絃舎浜子を嚆矢こうしとする。

*

大正五年世界大戦の余波は、我国の経済界をも動揺させた。横浜開港の時から生糸商、野沢屋の七十四銀行の取付けとなり遂に倒産した。

浜子の家では、当主賢吾氏が、子飼^{こがい}から野沢屋の店に育ったので、生糸店とは別会社、他の重役たちのように策を施さなかったので、父親譲りの財産は、無償^{ただばた}働らきのようにお店へかえしたとおなじことになって、預金はそのままになってしまった。しかも、浜子の父平兵衛^{へいべえ}が、長い間支配人として、どんなに店を富ませたか知れないので、莫^{ばくだい}大もない慰勞金が分けられることになったまま、父親が死に、主家の主人が二代つづいて死んだので、そのままになっていたのも、取らずじまいになってしまった。

「金持ちなんて、それは間違いだけれど、品物だけはどうにかこうにか、あるにはある。」と、浜子はいっていたが、名物ものや、美術品などはさほどでないとしても、横浜開港時に手に入れた舶来品が、忘れてしまうほどあったのだ。切子^{きりこ}の壺^{つぼ}ばかりも、好いのが沢山あった。古い洋酒が、土蔵^{くら}の縁の下にコロコロしていて、長持^{ながもち}の中は、合紙^{あいがみ}がわりに、信州から来る真綿^{まわた}がまるめて、ギツシリ押込んであり、おなじような柄の大島がすが、巻いたままで、幾本もはいつていて忘れたというふうであった。

「おやつちゃんに見せたことあるかしら、光琳^{こうりん}の蒔絵^{まきえ}の重箱を。」

と、いうと、賢吾氏が、二十五歳にもなるが、そんなのは私も見たことがないというようであつた。

炭は、土蔵の縁の下にも住居の下にも、湿けないようにと堅炭が一ぱい入れてあるといった家で、浜子一代は、どんなことがあつても家に手を入れないですむようにと、壁の中にも鉄棒のしんの入れてある念入りの普請を、父親は残しておいた。それらはみんな、大正十二年の震火災であともなくなつてしまつた。

「外国の保険だの、外国の銀行にあつたものだが、かえつて、こつちでは、わからなくなつてしまつても、ポツポツ先方から知らせてくれて。」

と、彼女は言つた。身をもつて逃れて、路で草履を拾つて母にはかしたといったほど、何もかも失つてしまつたが、秩序が回復すると、私たちにくらべれば、やつぱり閑かに暮してゆける人だつた。

「お店がああなつて、横浜にいたくつて好いのだから、東京へ来るのに、家を売ろうかと思つていろいろうちに――」

邸は震火に失つてしまつたのだ。彼女はあんまり用心深かつたことがいけなかつたといつた。一ツひとつ、思出の深い箒も、みんな焼いてしまつたが、思いがけない悦びは、芝

の寺島（菊五郎家）氏から、衣類をもつて見舞いにいった者が、家でも角の土蔵は焼けたが、母屋や、奥蔵が残つてといつて、お預りしてある箏も無事ですといった。

「おお、『若草』が——」

彼女は、すぐにも、『若草』という箏の絃に触れて見たい衝動を、おさえられなかったほどだった。

数日の後、荻原一家は、神奈川台の島津春子刀自の家にいた。この人も長い間の、年長の友達であつた。そして、小石川の浜節子の邸に落着いた。

これも、友達である三菱の莊田氏の令嬢である宮田夫人が、牛込余丁町の邸の隣地に、朱絃舎の門標を出させる家を造つてくれた。門をはいるとすぐ雷神木があるのを、私が、坪内先生の御邸内に建つた文芸協会へ誘つていった時に、その木が、お住居の門のすぐそばにある事を話したことがあつたので、浜子は、すくなからぬ奇縁のように悦んだ。

そのころ、坪内先生のお宅は、以前の文芸協会のあつた方に建つて、古いお住居や、お庭や、畑の方は莊田家で買とり、小路も新しくついていたが、まだ、先生のお家とお朱絃舎の間には、空地があつて、大きな樹が二、三本残っている。その樹の下のあたりで、浜

子は坪内先生と行きあつた。

彼女ももうだいぶ年もとつたし、震災にもあつたりして、気が練れて来たので、

「あたくしは、狂言座で、『浦島』を作曲させて頂きました、荻原浜子でございます。」と名乗りかけた。

「それは珍しいお方にあつた。」

と、晩年の、坪内老博士は大層よろこばれたといった。お話は尽きなかったのであろう、その後で、例年のように届けてくれる、小田原の道了さまのお山から取りよせる粟でつくつたお赤飯を、母が先生にも差上げたいといったから、持参してお話をして来たと、感慨深そうにした。

菊五郎門下の「菊葉会」に、九条武子さんの作、四季のうちの「秋」に作曲したが、長安ちやうあん いっぺん一片の月、万戸衣ばんこを擣うつの声……の、あの有名な唐詩の意味をよく作曲しだして、これはまとまった、情景そなわる名曲となった。私は、「虫」以来、彼女の作曲について遠ざかっていたが、「秋」の出来栄ばえをききにきてくれといわれ、出来がよかったので嬉しかった。

彼女は、近年ほんねんは殆ど、高橋元子もとこ（藤間勘素娥ふじまかんそが）の舞踊茂登女会もとめかいに出演し、作曲していた。

元子のお母さん姉妹きょうだいも、浜子の友だちだった。元子も朱絃舎門下で、浜子の晩年の日記は、元子を恋人とさえ呼んでいたが、育ちゆく人々は、いつまでも彼女の秘蔵弟子、愛いとしい人形ではいかなかったから、彼女は快々おうおうと楽しまない日がつづいて、そのうちに坪内先生のお棺ひつぎを送り、すぐまた、五十余年を、一日も傍かたわらを離れなかった、浜子の老母が、ぽくりと、それこそぽくりと、早朝あさ顔を洗いながら、臥床ふしどから離れる娘へ、

「羽織をひっかけないと寒いよ。」

と世話をやきながら、そのまま、うつぷして、娘と一緒に生涯を終ってしまった。

それからの浜子、さびしそうだつた浜子、来年は箏を弾いてから五十年になるから、祝いをしたいと思うといつて来た浜子。小閑を得て訪おもずれると、二階へともなつて、箏を沢山たてた、小間こまの机の前でこういつた。

「此処へ、上つて、作曲するだけが楽しみであり、生きている気がする。」

彼女の研究は、古楽こがくに、洋楽に、学問の方もますます深まっているようだった。何か素晴らしい作ものを与えて、彼女の沈みきつた心の灯ひを掻かきたてなければならぬ――

私がそう思った眼を見て、彼女は嬉しように、青い絃を張った箏をとりだした。

「これが、いつぞやお話した金井能登守かないのとのかみの作の箏。」

震災に、頭だけ、うつすら火をかぶったのを、名作と知らぬ持主が、売に出したものであろう、手に入れてよく調べると、胴の真ん中に銘があったのだ。

「能登守の作は、二面しか残っていないという記録があるから、そのうちのこれは一面です。好いあんばいに、天人の彫りは無事で、焦げた箇所は波形^{なみがた}ですが、その波形は彫^{ほり}でなくって、みんな、薄い板が組み合せてあるのです。」

その手のこんだ細工の波がたは、箏の縁^{ふち}を、すっかりとりかこんでいるのだった。彼女はこの箏に「青海波^{せいかいは}」の名を与え、青い絃を懸けた。

「この箏で、五十年の祝いには弾こうと思う。鼓村さん（那智俊宣^{なちしゅんせん}）が、放送したのもこれ、赤坂三会堂で演奏会を催して、この箏について説明をして、巻物にして書いておくといいが、そのままになってしまつて——」

京都へ行つてから、鼓村さんは絵の方を主にして、那智俊宣と名が変つていた。この古箏^{そう}の歴史についても委^{くわ}しかつたのであろうが、それよりも、私は、なんとなくいやな予感がした。鼓村さんは、間もなく歿^{なぐ}なつてゐるのだ。

関東における、八ツ橋流^{はし}を預つてゐる彼女の、含蓄のある真伎倆を、も一度昂揚^{かうよう}させるために、よい作を選び、彼女の弾箏五十年の祝賀にそなえたいと思ううちに、彼女も亡^なな

きには
母によばれたように大急ぎでこの世を去ってしまった。

病床についたある日、眼ざめていうには、

「お母さんが来て、お乳を飲めといつてあやした。」

彼女は赤んぼにかえつて、母の懐ふところにねむった夢を見たのだ、そして、間もなく逝いってしまった。

形見の名筆と、名剣を守つて、賢吾氏が一人さびしく朱絃舎の門標のある家に残つてい
るのを見ると、彼女が娘であつて、わたしが陸奥みちのくの山里にいたころ、毎日毎日、歌日記
をよこしてくれて、ある日、早い萩はぎの花を封じこめ、一枚の写真を添えて、この男を、亡ち
父が、養子に見立てておいたのですが——といつてよこしたことを思出す。

あなたおとうの亡父さんが、あなたのために考えておいたことなら、きっと、あなたがたを、
良くお世話してくださるでしょう。

私はたしかにそう答えたのを覚えていて、今は、白髪になった人の孤影を、お気の毒に
見守るばかりだ。病弱な浜子とは、殆ど夫婦関係ほとんということなしに、よく仕えいたわれ
た。

死ぬ前に、彼女はこういったという。

「こんど、大阪へ演奏にいったら、私がプランをたてて、大和めぐりに行きましょう。」

養子として、長い奉仕への、それがお礼心であったのであろう。立てなくなつてからも、張りかえをする障子へ、めしと、一ぱいに書いて、御酒肴おんさけさかなアリとつけたし、へへのもへじと、おかしな顔を描いた。慰安の旅も果さないで先立つということを、そんな、とぼけたやりかたで、謝わびていたものでもあつたろう。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人公論」

1938（昭和13）年5～7月

初出：「婦人公論」

1938（昭和13）年5～7月

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

朱絃舎浜子

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>